巻頭言

GENDER と SEX

林 由佳子
(京都大学)

令和6年度功労賞をいただき、その受賞講演をすることで、改めて学会とのつながりを認識し、講演では自分の想いを凝縮して語らせていただいた。選んでいただいた味と匂学会に深謝している。

講演時に壇上から聴衆を見ると、女性比率が増えたと思った。しかし、2024年にアイスランドで開催されたISOTでは、正確な参加者ジェンダー比はわからないが、女性がかかり多いと肌で感じ、シンポジストも女性が多数登壇していた。それに比べると、日本味と匂学会は途上にあると感じている。

そこで、現状を知りたくなって、事務局に調べていただいた。現在(2025年3月18日時点)の日本味と匂学会の男女比をみると、30%強が女性であり、学生会員は半数が女性である。卒業修了後もこのまま在籍を維持できたら、国際的にもジェンダーバランスの取れた学会になる日はすぐに来ると思う。大会長はすでに阿部啓子先生(2007)、尾崎まみこ先生(2017)、奥谷文乃先生(2019)がされており、初の女性学会長の誕生がそのうち誕生するであろうし、楽しみである。

表1 日本味と匂学会の男女人数および割合

	男性	女性	合計
	人数(人) 割合(%)	人数(人) 割合(%)	人数(人) GGI*
正会員	360 69.2	160 30.8	520 0.44
学生会員	42 50.0	42 50.0	84 1
名誉会員	12 85.7	2 14.3	14 0.17
臨時正会員	3 42.9	4 57.1	7 1.3
臨時学生会員	9 60.0	6 40.0	15 0.67
合計	426 66.6	214 33.4	640 0.5

*GGI:ジェンダーギャップ指数(女性/男性)0が完全不平等、1が完全平等

ジェンダーバランスは社会的にとりあげられており、何度も聞く話題であるが、性差に関してはサイエンスであり我々の研究に直結する。研究者であるにもかかわらず、私はマウス実験に雌を使ってきた。味細胞を単離して使用してきたので、系統、週齢、性によって組織の固さが変わり単離条件が大きく変わる。条件を決めるのに苦労したので、一旦決めた条件を大きく変えられないということから頑なに保ってきた。しかし、周りを見ていると、雌は性周期があるからと雄を使っているのが大半である。では、性周期が嗅覚・味覚に問題になるほど関係するのか? 性差で味覚・嗅覚が異なるのか?であれば、これは興味深い研究テーマになる。実際、味と匂の性差に研究論文数は少なくはない(味覚:約31,500、嗅覚:約111,000、google scholarによる)。しかし、そのメカニズムに迫る研究はほぼ皆無である。これには、性差よりも個人差が大きいことに起因しているようである。性ホルモンが直接にそ

れとも間接的に関与するのか、それとも別のメカニズムなのか。解明に向けての研究プロトコルを考えていると、長い夜は続くようだ。

最後に、ジェンダーに話を戻すが、出産・育児というものは時間がかかる。もちろん子供を「持つ」・「持たない」の選択肢はある。持つ選択をした場合、一番脂ののっているときに一線から外れるということ、外れた期間を含めて評価されることなど、まだまだ逆風は強い。味と匂学会の奨励賞は出産・育児の期間を加味してもらえる追い風も確かにあるが、雇用時に任期がついているものは、出産・育児は加味されない。例えば、任期が3年に設定されている、これをどうみるか。3年くらい待って、任期がなくなってから出産・育児をすればいいとみる人もいるが、それはサイエンス的には女性の20代後半から30代前半をしばりつけることによる出産に関する身体的デメリット、それに続く出産数低下も考えられる。また出産に踏み切っても十分な産休・育休をとれないということに結びつく。では、任期5年なら？出産・育児を待ってとはなかなか言えないであろう。男性も育児休暇の取得率が上がってきているので、男性からの声を強く期待したい。

私の時代はプライベートでは「結婚しないの？」→「子供産まないの？」→「二人目は？」、職場では「結婚したらやめるよね」→「子供産んだら仕事続けられないよね」という言葉を、道を歩いたらあたる信号の数ほど聞いた。常に「(私が考える)十分な収入が男性にあれば・・・」で乗り越えてきた。今は、「(妻が考える)十分な家事育児をする男性」となるのであろうか。この学会に所属するすべての男性女性にエールを送る。